

ダークツーリズムを通じた戦争記憶の継承と平和のまちづくり
 ~浅川地下壕をめぐるグローバル平和公共性の創造~
 Passing on War Memories and Creating a City of Peace through Dark Tourism
 ~Creating a Glocal Peace Public about the Asakawa Bunker~

グループ名:創価大学中山賢司ゼミ

磯崎舞¹⁾, 後藤正彦¹⁾, 菅野美桜¹⁾, 吉田華蓮¹⁾

指導教員:中山賢司¹⁾, 研究協力者:齊藤勉²⁾

1)創価大学 法学部 法律学科 中山賢司ゼミ

2)浅川地下壕の保存をすすめる会

悲劇の場を訪れることによって記憶の追体験を行うダークツーリズム。この新しい概念は未来のための教訓を得ることができるだけでなく、新たな観光資源として地域経済の活性化を促す可能性を秘めている。そして、その可能性が八王子にもある。

キーワード:ダークツーリズム, 記憶の追体験, 記憶の継承, 平和教育

1. はじめに

国民の物語(ナラティブ)としてナショナリズムの源泉となる戦争記憶は、視差による国家間の摩擦と同時に、忘却と風化の問題に直面している。とくに、後者の忘却・風化の昂進は、「歪んだ記憶回復」の土壌として、「記憶の政治」の連鎖と新たな政治的摩擦を再生産することが懸念される。だからこそ、事実ベースでの「戦争の記録」と、当事者(サバイバー、直系の遺族)の感情に根差した「記憶の継承」が不可欠である。日韓慰安婦問題を例

に挙げれば、歴史家や市民団体(WAM(女たちの戦争と平和資料館))などによって、歴史の「記録」と当事者の個の物語(ナラティブ)に根差した「記憶の継承」などが取り組まれてきた。しかし、戦後80年近くが経ち、当事者の不在が目立ってきた。近い将来、当事者不在の時代を迎えることが確実な今、当事者無き中での「記憶の継承」が重要な課題に直面している。具体的には、個々の当事者による物語(ナラティブ)の「記録」や戦争遺構の「保存」、それらを活用した平和教育やまちづくりが求められている。いかに当事者意識に接近しながら「記憶の継承」を行うべきか。私たちは、自分達の身近な場所に行った歴史を知り、当事者意識を持つきっかけとして、戦争の記憶を追体験することのできるダークツーリズムに注目した。

戦争や災害の跡といった悲劇の場を訪れることを指すダークツーリズムは、1996年にJ=レノンとM=フォーレーによって提唱された(井出 2015)。井出(2015)は、ダークツーリズムという概念は「ヨーロッパで急速に広がったが、

それは第二次世界大戦におけるナチズムの惨禍を二度と繰り返してはいけないという価値観に支えられていた。」「アジア諸国では、(中略)地域振興に活用する例が見られる」と述べている。日本においては、広島原爆ドームや長崎原爆資料館、沖縄平和祈念公園などの戦争の記憶に関するものに続き、2011年の東日本大震災で甚大な被害を受けた東北地方を中心とした災害に関するもの、長崎の端島の産業に関するものなど多岐にわたって存在している。広島の平和記念資料館には、コロナ禍前に2019年度には過去最多の232万人が来場した(中日新聞 2022)。日本経済新聞(2024)によると、東日本大震災で被災した岩手・宮城・福島3県の震災伝承館などへの来場者が2023年に過去最高となる約155万人にのぼった。このように、日本国内でのダークツーリズムへの関心は高くなっていると言える。

このダークツーリズムに関する関心は日本のみならず、世界的にも高まっており、例えば、ポーランドのアウシュビッツ強制収容所跡地への訪問者数はコロナ禍前の2019年には過去最多の232万人を記録している(Adriana, 2024)。他にも、アメリカのニューヨークグラウンド・ゼロ来訪者数は2019年時に640万人、9.11記念博物館には310万人が来訪している(中日新聞 2022)。このように、ダークツーリズムへの機運の高まりは世界的なトレンドにもなっていると言える。

2. 現状分析

社会的なダークツーリズムの機運は高まっているものの、大きな注目を集めているのはやはり原爆や地上戦などの国家規模のものであり、地域に根ざした戦争記憶を

取り扱っているものであるため、八王子市での比較には向かない。そこで、地域に根ざした戦争遺跡(戦争記憶)をもとに記憶の継承を行っている場所を比較検証する必要がある。その比較対象として、「多摩地域の戦争遺跡」が挙げられる。桐朋中学校では、社会科見学の一環で旧日立航空機変電所等を巡り、戦争と平和の問題を考える取り組みを行っている(桐朋中学校,2024)。旧日立航空機変電所を訪れ、コンクリートに残る弾痕を見るなどして学生は戦争の悲惨さを身近なものに感じている。また、東村山市と東大和市は「地域の戦争・平和学習及び広島派遣事業」の一環として、地域の戦跡をめぐったり、戦争体験者の話を聞いたりすることで、身近な場所での戦争の被害の追体験を行なっている。現在、八王子市には戦争当時の状況を知ることができる戦争遺跡は74箇所が存在する。それらは西南戦争に関わるものに始まり、日清戦争、日露戦争、日中戦争、そして太平洋戦争に及ぶ。戦争遺跡の分類は8種類存在し、八王子に現存する例に当てはめると「役所や学校などの自治体施設」「陸海空軍埋葬地や墓地」「防空壕跡や慰霊碑」がある(小学館1993)。特に、飛行機製造の地下工場として使われた浅川地下壕は総延長およそ10kmと国内最大規模である(NHK 2022)。また、戦後50年が近づくと、戦争体験を語るができるのは人から物へと移り変わっていった。戦争の記憶を言葉で語り継ぐ機会は年々少なくなってきたが、戦跡は永遠に残る上に自分たちで守っていくことができる。そして、それならば戦争遺跡を保存していこうという運動が全国的に高まった。八王子では、残っている戦争遺跡の中でも浅川地下壕の保存が注目された。以降、戦争遺跡の調査が進められ、2000年頃からは戦争遺跡に関するブックレットが全国各地で発行されるようになった。八王子にも、市役所が発行した「八王子戦跡マップ」が存在する。しかし、国内最大規模とされる浅川地下壕ですら、知名度があるとはいえず、八王子市の戦跡はあまり知られていない。

3. 課題抽出

これらのことを踏まえて得られる最大の課題は浅川地下壕という地域に根ざした戦跡を平和学習に生かされていない点である。その理由として、見学へのアクセスの難しさが挙げられる。浅川地下壕の入り口は私有地になっているために現在、浅川地下壕保存の会が主催する浅川地下壕への見学は月に一回の見学で、一回あたり、20-30人しか参加することができない。その結果、アクセスしたくてもできないという事情がある。

4. 政策提案

以上を踏まえ、私たちは「八王子市でのダークツーリズム」を提案する。本提案によって、浅川地下壕をはじめとする戦跡を通じたダークツーリズムを企画することで、参加者は戦争の記憶を追体験することができる。多摩地域の戦争遺跡や東村山・東大和市の事例などから、現地の学生が身近な戦争の記憶を学ぶことが遠い話題のように思える戦争に対

して当事者意識を持つきっかけとなり得ていた。このことから、八王子市内の小学校高学年以上の学生をターゲットとして、戦争問題に関しての当事者意識を持つきっかけとして、身近な戦争記憶を追体験するダークツーリズムの提案に至った。そこで、前述した事例を八王子市に置き換えた時に、地域に根ざした戦跡として、国内最大級規模にもなる浅川地下壕をベースにしたダークツーリズムを企画することができる。そして、そのダークツーリズムを通して、学生は戦争問題を自分の住む地域にあったのだという当事者意識を持つとともに、同じ過ちを繰り返してはいけないという平和への教訓を得ることが期待される。

<参考文献>

- 井出 明 2015「ダークツーリズムの真価と復興過程」
<https://f-gakkai.net/wp-content/uploads/2020/09/13-1-7IDE-1.pdf>
 齊藤勉,井上健編「ガイドブック 八王子の戦跡」揺籃社 小学館 1995「日本大百科全書」
 中日新聞 2022年6月8日「<ダークツーリズム>(前編)悲しみの地 旅する意義は」
<https://www.chunichi.co.jp/article/485544>
 桐朋中学校・桐朋高等学校「中2社会科見学が行われました」<https://www.toho.ed.jp/topics/3100/>
 日本経済新聞 2028年2月8日「東北の被災3県、伝承施設の来場が150万人超え 23年」
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOCC088X30Y4A200C2000000/>
 NHK(2022年11月11日)「八王子・高尾山近くの国内最大規模“地下壕” 東京高専が3次元映像化」
<https://www.nhk.or.jp/shutoken/wr/20221111a.html#:~:text=%E5%A4%AA%E5%B9%B3%E6%B4%8B%E6%88%A6%E4%BA%89%E6%9C%AB%E6%9C%9F%E3%81%AB%E9%80%A0%E3%82%89%E3%82%8C%E3%81%9F%E3%80%8C%E6%B5%85%E5%B7%9D%E5%9C%B0%E4%B8%8B%E5%A3%95,%E3%81%A8%E5%9B%BD%E5%86%85%E6%9C%80%E5%A4%A7%E8%A6%8F%E6%A8%A1%E3%81%A7%E3%81%99%E3%80%82>
 Adriana Sas, Jan 30, 2024「Number of visitors to the Auschwitz-Birkenau State Museum in Poland from 2001 to 2023」